

『思いをつなぐ』

部報編集委員会 顧問 瑞穂小学校長 戸嶋 秀樹

この度、本原稿の執筆依頼をいただき、今から25年ほど前のことを思い出しました。自分が、この算数部報「数」の作成に携わらせていただいた時のことです。

編集作業の引継ぎのため、自校の勤務を終えてから委員長を務められていた先輩の所属校におうかがいし、編集作業の体験をしました。当時はまだ校務用パソコンがなく、執筆者それぞれが個人使用していたパソコンで作成した原稿を印刷し、それぞれをちょうどよい大きさにはさみで切り、B4サイズの台紙にのりで貼り付けていきました。今ではあまり行わなくなった、いわゆる「切り貼り（きりばり）」という方法です。それ以前はワープロで作った原稿を切り貼りし、さらにその前（私の知る範囲ですが）は手書きで作成していたとうかがいました。そういえば、この頃のお便りやプリントはB4やB5サイズが当たり前でしたね。とても懐かしいです。

編集作業は、タイトルやカットなども全て切っては貼っていきますので、なかなか時間のかかるものでした。ただ、作業の段取りや方法を教えてくださった先輩が、台紙とにらめっこしながら丁寧にのり付けをして、注意深く各パーツを貼っていた姿を今もよくおぼえています。先輩は、「これを読む先生方が、見やすく読みやすいように作らないとね。」や「他校の先生方の実践を知ること、算数の授業に対する先生方の興味・関心が高まるとうれしいね。」という話をされてきました。私は、先輩のこのような姿やお話から、算数に対する熱い思いと、読み手のことを考える思いやり、情報発信、情報共有の大切さなどを感じたものでした。

昭和の時代から続いてきた部報づくりの方法はだいぶ変わりましたが、たくさんの先生方に読んでもらいたい、算数科の授業に関する刺激を受けてもらいたいという部報編集委員会の思いは、長きに渡り受け継がれています。校務御多用の中、毎回熱心に編集作業を進めていただいている編集委員の先生方に感謝するとともに、各校の算数主任の先生方には、今後も算数部報「数」を学校の先生方に広く紹介していただくことを続けていただけたらうれしく思います。

第3回研修会実践報告

社会に開かれた算数教育

～数学的な見方・考え方を働かせながら、学び合う喜びを味わえる授業を目指して～

研究推進委員長 浜松市立広沢小学校 中村 和樹

研究推進副委員長 浜松市立雄踏小学校 中村 佳樹

1 4年「整理のしかた ～4年1組の〇〇な人には、どんな人が多い?～」

授業者：浜松市立広沢小学校 中村 和樹先生

本時の目標

自分が予想した「〇〇な人には、～～な人が多い」という傾向を調べるために行った、二次元表を用いた分析について他者とともに考察することを通して、考えを見直すことができる。

授業の流れ

- ① 前時に行った二次元表を用いた分析の仕方（2項目とも「はい」の数に注目すること、大小を判断するために比較すること、半数以上なら「多い」と判断すること）について振り返る。



- ② 各班で、一人一人の分析と結論が正しいかどうかを話し合わせる。考察の視点として、「詳しい説明が必要なところ」「その数に注目した理由」「他に注目した方がよい数」を与える。
- ③ 班の話合いで出された意見を基に、自分の考えを見直させる。
- ④ 二次元表を使って分析して感じたこと、どのように考えたらよかったかについて振り返らせ、全体で共有し、二次元表を使うことのよさを確認する。

成果と課題

- ・ ワークシートに「傾向の予想」「その理由」「二次元表を使った分析」「結論」という枠が設けられており、児童が考えやすくなるよう工夫されていた。
- ・ 4つの起こり得る場合を表す二次元表は読み取ること自体が難しい。そのため、2項目がともに「はい」の数が他の3つの数より多いかどうかで考える児童が多く、表を横や縦に見て比較する児童が少なかった。その状態で班による考察をしたため、考えの伝え合いに終わってしまった。二次元表を使った考察を行うかどうかは、実態を十分に理解した上で行う必要がある。
- ・ 終末に振り返りを行ったが、一部の児童による発表で終わってしまった。表の見方についての振り返りを班で話し合った後、班ごとに発表し、全体のまとめとする方法もあった。

2 1年「かたちあそび ～ゆめのまちをつくろう～」

授業者：浜松市立中ノ町小学校 高橋 遼平先生

本時の目標

ものの形に着目し、身の回りにあるものの特徴を捉えたり、具体的な操作を通して形の構成について考えたりすること。

授業の流れ

- ① 「箱を使って、町にあるものを作るには、どうしたらいいかな。」という問いから、町にあるものを考えさせ、何を作るのか見通しをもたせる。その際に、教師が作ったエラーモデルを提示する。そこで、形の特徴を捉えて作ることや、形以外の要素（色など）を考えなくてもよいことを押さえる。
- ② 大量の箱の中から使いたい箱を選ばせ、自分が作りたいものを作らせる。（個別活動）
- ③ 作ったものをクイズ形式で見せる。答える児童には、何に見えるのか、その理由は何かを、形に着目して答えさせる。（全体→グループ）
- ④ 箱が散らばった状態になっているところから、箱を整理するという次の活動の見通しをもたせ、次時につなげる。



成果と課題

- ・ 導入段階で、教師がエラーモデル（首の部分の箱が短いキリン）を見せたことで、形の特徴を捉えて、自分の作りたいものを作るという本時で働かせたい数学的な見方・考え方が児童にとって明確になった。
- ・ 個別活動後の全体交流で、作ったものをクイズ形式で全体に提示した。クイズ形式にすることで、何を作ったか正解するために、どの部分を、どのような形の箱を使って作っているかよく考えていた。それによって、全体交流の場面でも、形の特徴を捉えることが意識されていた。
- ・ より対話が深まるように、全体交流の場面での授業者からの問い返しや、グループ交流場面での子供同士の問い返しがあるとよい。

事後研修を含め、大変実りのある研修会となりました。
中村先生、高橋先生、ありがとうございました。